

総評

第1間に小問集合が追加され、大問6題構成となった。ただし、論述問題5題を含む、総問題数30題の出題数については変化はない。内訳は用語記述5問(15点)、選択問題20問(60点)、論述問題5問(25点)であり、初出となる第一問の小問集合以外はすべて〈語句3点 選択9点 論述5点〉という配点構成に統一された。学年別の内訳は中1内容21点、中2内容36点、中3内容43点となり、分野別では地理8問(26点)・歴史9問(34点)・公民が13問(40点)となっており、中3・公民内容からの出題が多い。難化した一昨年、易化した昨年と比較すると宮城県の入試としては平均的な難易度であり、平均点は昨年よりやや下がっての50点台後半と思われる。

難易度・出題単元・解法のポイント

【第一問】小問集合 《普》 計15点 本年初出題となる、三分野混在の小問集合

表紙に問題がはみ出してくる都合上、山口県のような小問集合が加わる可能性は予測済みであり、該当県の過去問はレギュラー授業でも実施済み。スペースの都合上か、地図やグラフ等も伴わないシンプルな選択問題が5題出題されている。1:ギリシャ文明を問う設問は中1歴史ということもあって意表を突かれたかもしれないが、残り4題はレギュラー授業・講習会ともに頻出の定番問題。来年度以降もこの形式が継続される場合、数学同様に『第一問は満点を目指す』が前提となるだろう。

【第二問】日本地理 《易》 計17点 九州地方の農業に関する出題。中2の基本問題レベルであり、ひねりもない。

1(1)~(3), 2(1):すべて春期講習会・夏期講習会で学習済みの基本問題。出題の仕方もストレートであり、1(3)に至っては、他に長崎・大分と魅力的な選択肢があるにも関わらず、なぜか一番読み取りやすい鹿児島県を出題している。2(2):国産農産物のブランド化による外国産農産物に対する競争力の向上については、【レギュラー授業『資料論述』】で演習済み。防災の観点を付け加える点のみ目新しいが、災害による農産物の供給不安定は【入試直前ゼミ第1回】の論述で実施している。

【第三問】歴史 古代～近世 《易～普》 計17点 飛鳥時代～江戸時代からの出題。時代区分を確認し、確実に得点を。
2～3:選択肢を時代区分で判断するのは入試の歴史を解く基本パターン。3は【秋期講習会 政治史】で選択肢すべて扱っている。4:江戸時代の文化は【実戦ゼミ】【夏期講習会】で出題。5:江戸時代の水運を用いた輸送に関する論述問題。【秋期講習会】で水運、【冬期講習会】で江戸大阪間の輸送、【入試直前ゼミ】で西回り航路を利用した中継輸送と、よく似た論述を三度も扱っている。あすなろ学院&G-PAPILSで入試対策をしてきた生徒なら完答5点を狙える。**【第四問】公民 情報化社会 《普》 計17点 情報通信技術関連産業を中心とした出題。演習量が足りていれば平易。**

1(1)(3):冬の【理社基本語句暗記大会】にて出題。なお、語句記述問題5問中3問は暗記大会が的中している。2:レギュラー授業で実施。定期テストレベルの基本問題。3:オンライン診療の利点=移動が不要、課題=デジタルデバイス、と資料を見ずとも方向性は予測できる。まして、資料では高齢者の移動手段・年齢階層別のインターネット利用率とリードも丁寧。答えるべきことが2つあることさえ見落とさなければ大きな問題はない。

【第五問】地理・歴史融合 《普～難》 計17点 南アメリカ州を題材とした地理・歴史の融合問題。論述が新傾向。

1(1):赤道の位置と高山気候の特色が分かれば読める雨温図である。【夏期講習会】【実戦ゼミ】でどちらも繰り返し登場している。2(2): ブラジルの食文化の形成にある歴史的背景を問う論述問題。資料読解が定番の宮城県において、まさか模範解答が【歴史的背景】だけだと誰が思ったであろう。訓練された受験生のほとんどが食文化の形成にまで触れたはずであり、この形式の論述が今後も出題されるとしたら、論述対策は大きな転換が必要となる。

【第六問】公民 國際社会 《易～やや難》 計17点 近現代の歴史に関する出題と、公民分野の融合問題。

4(1):本年度唯一の資料読取問題。R2の3問、R3の2問と、近年出題数が着実に低下している。4(1):ODAの二国間援助に関する資料は【実戦ゼミ第8回】で扱っている。4(2):資料の読み取りまでは難しくはないが、途上地域の発展に対する期待として「持続可能な発展」は知識を元にせねば出てこない。資料を読み取るだけではなく、その前提となる知識が必要とされる、宮城県らしい思考力型論述としては、本年屈指の良問と言える。